

紙とデジタル

理解度に差？

紙の本はなぜ買われなくなつたのか。以前より活字離れを指摘する声はあるが、それほど単純ではなさそうだ。

コロナ禍の2020年と21年は感染症をモチーフにした小説「ペスト」がブームになるなど、一定の巣ごもり需要があった。行動制限が緩和された23年以降は物価上昇が家計を直撃し、書籍などの出費を抑える影響が生じている可能性がある。

出版科学研究所によると、23年は紙の出版物（書籍、雑誌）の販売額が前年比6・0%減となっただけでなく、出版市場全体が2年続けて前年割れした。その中で電子書籍は電子コミックを中心に6・7%も増加した。24年度からは小中校の英語でデジタル教科書の本格導入が始まり、電子書籍は今後さらに浸透することが予想される。

こうした流れに懸念を示す人がいる。「脳を創る読書」の著者、東京大学大学院教授の酒井邦嘉さん(59)＝言語脳科学＝は、紙の本と電子化された同じ本では理解度に差が出たとする研究がある」と指摘。子どもの読解力の低下からIT先進国のスウェーデンで紙の教科書に回帰する動きがあるとし、本のどのあたりを今読んでいるかなど「視覚や触覚の情報は記憶を助け、思考を引き出すツールになる」と述べた。また、デジタル教科書を巡って、酒井さんは「AIや電子化が新しくして良いものというのが先にあり、検証がなく、議論がなおざりだ」と訴えた。